

第2支会

1 地域の概況

本地域は青梅市の東南に位置し、地域の中央を西から東南方向に流れる多摩川の河岸段丘上に形成された集落で、南は西方の愛宕尾根から続く長淵丘陵あるいは大荷田丘陵とも呼ばれる草花丘陵を境に日の出町・あきる野市に接し、北は段丘を介して旧青梅町に接している。

本地域の最高地点は、かつて交通の要所として利用されてきた^{こんにやく}蒟蒻峠とも呼ばれる旧二ツ塚峠で、境界となる草花丘陵の最高地点でもある。標高は356メートルで、稜線はそこから緩やかに東から東南方向に下り、友田町から菅生に続く旧満地峠の標高は226メートルとなっている。

概して、本地域は、西南に高く東北に向かい低くなり、丘陵部多くして平坦部が少ない地域で、その形状は多摩川流域に沿い東西に長く南北に短くなっており、面積は約10平方キロメートルである。

旧調布村を支会の地域として長年歩み続けてきたが、人口の増加、環境の変化などに伴い、昭和56年4月に河辺地区が第10支会として新たに歩み始めた。以後、本支会の地域は、多摩川の右岸を占める駒木町、上長淵、下長淵、友田町、流域を隔て左岸に位置する千ヶ瀬町の5地区となっている。

かつては青梅夜具地を織り出す機業のまちであった本地域も、時代とともにさまざまな職業をもつ人々の住宅地として生まれ変わり、高層のマンションもみられるようになっている。

交通の面では、多摩川の南側を走る吉野街道と北側を走るいわゆる千ヶ瀬バイパスが主な幹線道路であり、吉野街道の一部は昭和57年4月に国道411号線になり、あきる野市との境をなす満地トンネルは平成6年2月に新満地トンネルが完成し、旧トンネルの道路幅員の狭さ等々が改善され安全な交通が確保されてきた。

一方、昔から南北の交通の妨げとなってきた

多摩川には、江戸時代から橋を架ける多くの努力がされてきており、地形上、技術や経費の面から橋を架けることのできない場所には渡し場を設け、南北の交通を図ってきた。本地域にも、千ヶ瀬の渡し、友田の渡し、下長淵の渡し、駒木町と対岸を結ぶ大柳の渡しがあった。しかし、これらの渡し場も明治後期から昭和初期にかけ、橋が建設され、その役目を終えている。

現在本地域には、上流から万年橋、調布橋、下奥多摩橋、多摩川橋と橋が架かり、地名を残す調布橋は、千ヶ瀬の渡しに替わり大正11年に竣工した吊橋から数え三代目の橋で、平成5年に完成。また、多摩川橋も三代目の橋で、最初の橋は大正9年であった。一方、上下線が分離している万年橋の下流側の橋は補強されてきたものの、明治40年以來の架け替えで、平成17年に完成した。明治における万年橋の姿は、大下藤次郎の水彩画に見ることができる。



駒木町から長淵・友田・千ヶ瀬方面を望む

本地域を流れる多摩川は、山梨県と埼玉県の間をなす笠取山の水樋を水源とし、一ノ瀬川、丹波川とその名称を変え奥多摩湖を過ぎ多摩川となり、本地域に西方から入り友田町方砂で羽村市に下る。流域の景観について、調布村誌資料は「其の流域に於ける碧潭の主なるものを擧ぐれば左の如し」として「釜の淵、赤岩（駒木野）、檜の木淵（千ヶ瀬）、次郎淵（上長淵）、猿淵（下長淵）、浅間淵（友田）、白はけ（河邊）」など16か所を挙げている。

支流は数筋あり、清美川は二ツ塚から出て駒木町喜代沢で多摩川に合流しており、流路延長は約2.9キロメートルである。鳶巣川は二ツ塚から北に向かい、途中から東に向きを変え下長淵で多摩川に合流している。流路延長は約2.2

キロメートル。大荷田川は大仁田川とも書き、二ツ塚を水源として東に向かい友田町方砂で多摩川に合流している。

市民の憩いの場として釜の淵公園があり、市立郷土博物館の前には鮎美橋が架かっている。

この鮎美橋は、公園一体の活用と付近住民のために架設されたもので、昭和59年3月3日に開通式が行われ、駒木町と千ヶ瀬町、青梅駅を結ぶ近道として日々多くの人々に利用されている。また、青梅簡易保険保養センター「かんぼの宿 青梅」が多摩川を望んで建ち、四季折々に訪れる利用客も多い。

教育面では、市立の第二小学校、友田小学校、第二中学校があり、また長淵丘陵の一角には明星大学青梅校舎が建つ。一方、釜の淵公園には市立郷土博物館があり、重要文化財である旧宮崎家住宅とともに青梅の歴史と文化を伝えている。また、体育施設として友田レクリエーション広場、長淵水泳場が多摩川河畔に設置されている。

幼児教育、児童福祉にあっては幼稚園1か所、保育園6か所があり、介護老人福祉施設としては4か所の特別養護老人ホームがある。

一方、駐在所は4か所に置かれ防犯の要になっている。

平成21年、本地域は2万2千人余の人口を擁す地域となっているが、大正14年10月1日の第二回国勢調査による人口は957戸、5,733人であった。

調布村誌資料は調布村の地球上の位置として、西端（駒木野）東経139度14分37秒、東端（友田）東経139度17分50秒、南端（友田）北緯35度45分9秒、北端（千ヶ瀬）北緯35度47分5秒、と記している。

2 地域の歴史

この地の歴史は古く、既に縄文時代中期には人々は住んでおり、千ヶ瀬遺跡では人体文が装飾された深鉢が、駒木野遺跡では蛇と猪と思われる文様が口縁部に装飾された土器が、また寺改戸遺跡では重要文化財に指定されている注口

土器、そして喜代沢遺跡では土錘や石錘の漁撈具と、当時の生活をうかがえる多くの遺物が出土している。また友田町の方砂遺跡から発見された縄文時代後期初頭の敷石住居は、小金井市の江戸東京たてももの園に移設保存されている。

中世この地を支配したのは三田氏で、室町時代の終り頃からその勢力範囲が三田谷と呼ばれるようになり、江戸時代には三田領となり、この名称は明治維新まで用いられていた。市の有形文化財である友田の鱒口や下長淵の旧宝林寺文書に三田氏の間係を見ることできる。

市史は、友田の御嶽神社に懸けられてあった鱒口の銘文「敬白武州柚保長淵郷共田金御嵩御宝前鱒口大且那平憲清」にある平憲清という人が新編武蔵風土記稿や小田原編年録から三田氏の一族であり当主であったとも考えられるとしており、旧宝林寺文書に記されている三田朝貞、勝千などという人々も、当時の三田氏一族中の有力者であろうとしている。

田中義成氏（東大史料編纂官）は、大正8年青梅における講演会で、「このように多くの寺々を、比較的狭い所に持っているということは、余程三田氏の文化が進んでおり、且つ経済力が豊かであったことを推測することができる」と述べている。

さらに、この文書には、「すだかの村」や「宝林庵」の名が載っている。すだかの地名は寛文8年（1668）の検地帳そして明治4年（1871）の村絵図にも記されていたが、その後は消えてしまっている。鳶巣川に注ぐ小川に架かる「須高橋」にその名を見ることができる。また宝林庵は明治初頭に廃寺となっている。

天正18年（1590）徳川家康が関東に入国し、この地方は森下に陣屋が設置され、その支配下におかれた。延宝8年（1680）の森下陣屋支配地の中に三田領（羽村以西）の名がある。

近世初頭、師岡村の名主吉野織部之助は武蔵野開拓を八王子代官に願い出る。許可が下りると近隣の村々に新町開拓を呼びかけており、この廻状は本地域の長淵村、駒木野村、千ヶ瀬村にも及んでいた。

江戸時代庶民の間で伊勢神宮参詣が盛んにな

り、市内でも道中日記などが発見されている。市史史料集「村鏡（上長淵村）」の天保3年（1832）の項には、伊勢神宮参詣など遠国へ旅する際の準備事項が述べられており、「伊勢参宮の外、神社仏閣参詣のための遠国出行は相成ず候。もっとも、伊勢参宮にまかり出候者これあらば、……」とあることから、庶民は簡単に旅に出ることはできなかったものの、伊勢神宮参詣は例外であった様子を知ることができる。

青梅は江戸時代中頃になると経済的にもめぐまれ、江戸との交流を背景に文芸活動も盛んになり、さまざまな分野の作品が残っている。

寛政10年（1798）駒木野に生まれた石川文松は、青梅の宿で蒟蒻製造を営んでいたが、江戸に出て蒔絵師となり、のち谷文晁の門に入り一家をなしている。画業には山口観音堂の六歌仙の大額、武蔵村山市真福寺本堂杉戸の十六羅漢図、天井の百花百鳥図などがある。畑中の生まれともいう。また、二世好々居を継いだ浜中調布は、明治から昭和にわたるこの地方の俳壇の宗匠で、本名は浜中丈之助。調布村長として「調布村誌資料」を編纂している。

同じころ（江戸中期）、多摩川の鮎には「鮎運上あゆんじょう」と呼ばれる税金がかかっており、駒木野・長淵・友田の各村が鮎運上を差し出している。市史は、千ヶ瀬・河辺・青梅・日向和田・御岳など史料のまだ見つからない多摩川べりの村々でも、おそらく鮎運上を納めていたのではないかと考えられるとし、また鮎は、鮎運上とは別に、現物で江戸初期から特産物として江戸城に上納されていたようで、御菜鮎（御用鮎ともいった）と呼ばれていたと記している。

一方、多摩川上流で切り出された木材は「青梅材」とよばれ、「筏いかだ」に組まれ江戸まで運ばれていた。しかし鉄道、自動車の発達により大正末年にはその姿を消している。千ヶ瀬の河原は筏会所いかいしよがあったところで、筏はこのあと羽村堰、拜島、立川と多摩川を下っていった。

明治維新をむかえ、上長淵、下長淵は前橋県に、他は蕨山県に属す。明治22年（1889）駒木野、上長淵、下長淵、友田、千ヶ瀬、河辺の6村が合併して調布村が誕生した。東京府編入は4

年後の明治26年（1893）である。

江戸時代末期から明治時代初期にかけて、市内には寺子屋や私塾が多く、市史によれば市内39か町村に52か所あり（うち本地域には6か所）、当時の学問への情熱がうかがえる。市内でいちばん古いのは友田村の天保元年（1830）の開設である。

明治4年（1871）この地方初の郷学校「協心神習舎」が本地域に創設された。現在の市立第二小学校の前身であり、学制発布（明治5年）の前年のことであった。このことは、これまで積み重ねてきた学問の大切さへのあらわれといえよう。

明治6年の「小学舎創立届（明治6年6月）」を見ると、本地域では友華学舎（友田村）、神習学舎（下長淵村）、臥竜学舎（駒木野村）の3か所が載っている。

後年市内には、明治43年（1910）に府立農林学校が開校し、大正12年（1923）には青梅町外六ヶ村組合立実科高等女学校が開校しており、創立時の教員には作家・高垣眸がいる。

青梅の織物は、伝えるところでは室町時代に始まるといわれるが、はっきりとした資料はない。青梅の織物が文献にあらわれたのは享保17年（1732）の「万金産業袋」で、青梅島（縞）という名で記されている。

本地域では明治時代中頃になると蚕業さんぎようが大きな生産業となっていたが、大正時代に入り、第一次世界大戦の影響で諸工業がにわかになり、労働力は不足し、生産費の膨張などから経営は困難になっていった。大正7年（1918）東京府は蚕業の改善発達を図るため養蚕組合設置を奨励する規程を公布した。大正11年（1922）に駒木野、その後、友田が養蚕組合を設置して発展に努めていった。

また織物製造業も歴史があり、大正時代後期には従業員の観劇会も行っていた。市史に載っている「大正2年における市域内工場・会社数」の工場をみると、20か所のうち16か所が調布村にあり、すべて主要製品は織物関係であった。この統計にある工場の従業員は10人以上となっている。戦前の最盛期は昭和11、12年

頃といわれており、青梅郷土誌は青梅織物の項で「絹、綿並に交織等専ら夜具地として多数の品種を数へ年産 8,879,578 円（昭和 13 年）を出すに至り夜具地産地として三河播州伊勢を眼下に見て全国一を誇るに至った」という。

日中戦争から第二次世界大戦へと戦争が拡大していくと、戦時物資として重要な金属類の不足を補うため金属の回収が行われ、織機も例外ではなかった。昭和 18 年織物工場を軍需工場へという戦争政策に織物業界は転換期を迎えたのである。

終戦後、連合軍司令部は経済に関する管理方針を発表した。戦争の影響を受け厳しい状況にあった青梅の織物業界も、この方針に基づき次第に復興の道をたどり織機台数も増えていった。織物業界を救ったのは昭和 25 年に勃発した朝鮮戦争で、軍事物資の調達と海外からの需要で商品価格が急騰し好景気が出現した。いわゆるガチャマン景気である。高度成長期に入ると生活も変化していき、マットレスの普及などにより夜具地の需要も減退していった。昭和 38 年からはタオル製品の生産も開始され、昭和 50 年代後半にはタオル、シャツなどが主要製品となっていった。

東海道中膝栗毛、江府風俗志などに出てくる青梅縞から時代を経て、着尺地から夜具地、浴衣地そしてタオルやシャツへ、小幅織物から広幅織物へと変遷してきたのである。

戦後の混乱も落ち着きをみせてきた昭和 26 年、調布村、青梅町、霞村の 1 町 2 村は合併し青梅市となる。そのとき市役所の長淵出張所が置かれたことから、本地域は「調布地区」あるいは「長淵地区」と呼ばれるようになっていく。長淵出張所は昭和 36 年まで置かれていた。昭和 29 年になると、初めての市営住宅が下長淵に 8 戸、裏宿に 16 戸建設されている。

昭和 30 年、青梅市は 4 村と合併し現在の青梅市域となる。人口は 54,754 人であった。

昭和 40 年代に入ると東京拘置所の移転候補地に友田地区があがり反対運動が起こったが、同 43 年法務省側から栃木県への移転が発表されるに至り終止符がうたれている。また同年、

本地域に町字区域合理化作業が行われている。

一方、調布小学校、調布中学校が現在の第二小学校、第二中学校になったのは昭和 28 年のことであり、友田小学校の創立は昭和 52 年である。また、地域に親しまれた分校は、昭和 37 年に千ヶ瀬分校が、昭和 41 年に友田分校、駒木野分校がその歴史を閉じている。

市民センターの開設は昭和 52 年であり、昭和 60 年には青梅消防署長淵出張所が開設され、生涯学習、市民活動、地域防災等々の拠点となっている。また、友田町を通る首都圏中央連絡自動車道の青梅・日の出間が開通したのは平成 14 年であった。新しい南北道路といえよう。

古くからの南北方向の道路は、かつて成木石灰も通った満地峠であり、宝暦事件において村々の代表が密かに相談した斑峰に続く二ツ塚峠である。明治の末年、「野の坂の春の木立の葉がくれに 古き宿見ゆ武蔵の青梅」と若山牧水が詠んだのも二ツ塚峠であったという。

3 支会の活動

本支会は 5 地区 25 自治会からなり、各地区の連合自治会をもって組織し、住みよい地域づくりと市政への協力を推進している。支会の役員は監査を含め 7 人で、5 地区の連合自治会長によって選考し、総会の承認を得て就任する。

5 地区とは、駒木町、上長淵、下長淵、友田町、千ヶ瀬町で、現在の住所に使用されている名称である。その名称は調布村誕生以前の村名を基にしており、古くは新編武蔵風土記稿などに出てくる名称を継承しているといえる。

各年度の事業等は、正副自治会長が出席して開かれる総会で審議され決定される。また、事業遂行に関する詳細や各連合自治会間の



あるこう会・釜の淵公園にて

連絡調整、諸団体等との連携、協力等については、連合自治会長で組織する役員会議で決定し遂行している。

支会の活動は、単位自治会、関係団体、関係機関との連絡を密にして行っており、近年では、住民が安全で安心できる環境を目指し、特に子供たちの健やかな育成を願い、地域の安全を守る会を発足し活動を開始している。

住みよい環境の整備には災害時の対策がある。支会の災害に対する体制づくりは昭和56年3月に遡る。災害時の適切な対応、防災意識の高揚を目的に、防災対策委員会を発足させており、各地区において毎年防災訓練を行っている。また、住宅の火災防止については住宅用火災警報機の普及を図ってきた。

他に支会が主となり実施しているものに消防団歳末警戒激励会があり、市民センター駐車場を会場に年末の厳寒の中で行っている。また、社会を明るくする運動長淵地区の事業を共催で行うほか、調布大祭実行委員会や市民センター事業への参画、協力をする一方、自治会の発展、相互の情報交換を図るため研修旅行、新年懇親会などを行っている。他方、戦没者追悼式への参列、小、中学校の入学式、卒業式等の諸行事、各種団体の総会等への出席がある。

地域住民の体力づくりの推進に関しては、体力づくり推進会が中心となり、市民運動会、ビーチボール大会、ファミリーゴルフ大会、あるこう会等々を実施している。特に平成17年5月に行ったあるこう会で、高尾山において足を負傷していた人を助けたことは、まだ記憶に新しい出来事である。

市民への広報物の配布をはじめとする青梅市への協力はもとより、青梅市自治会連合会の諸活動に参画、協力するとともに、青少年の健全育成を推進するため青少年対策委員会事業やゴミ減量、資源回収等の環境美化推進事業への協力・助成、また各種団体等が行う募金活動や会費のとりまとめへの協力を行っている。

本地域の幹線道路として日の出町、五日市へ続く秋川街道があり、この道路は、隣接する日の出町に建つ二ツ塚廃棄物広域処分場へ出入り

する車両の運行経路にもなっている。このため、廃棄物などを運搬する車両の運行等に関して協定書を結び交通環境の向上に努めている。

近年の自治会への加入状況を見ると、平成13年度5,656世帯、平成16年度5,561世帯、平成20年度5,466世帯、平成21年度5,419世帯と推移しており、減少傾向を見せてきている。この傾向は全支会的な傾向を見せており、自治会連合会の加入促進事業とともに本支会においても、新しく住民となった世帯を主に訪問し、リーフレット等により説明し自治会への加入促進を図ってきている。

支会の活動は、年月の経過とともに変遷し、また時々起こり来るさまざまな問題に取り組んできた。

これまでの半世紀にわたる歴史に学び、またその歩みを継承し、今後もより住みやすい地域の創造に向け、事業の充実、諸問題への対応に努めていくものである。

4 各種団体と事業

(1) 体力づくり推進会

体育事業は本推進会が中心となり行っている。支会役員、体育指導委員、体育部長で役員会を構成しており、会長には支会長が当たる。

市が開催する市民運動会は、昭和46年10月10日に開催された「青梅市制施行二十周年記念第12回市民運動会」が最終で、その後は各地域で行われるようになり、本支会では毎年10月に市民運動会を行っている。また、あるこう会、ビーチボール大会、ファミリーゴルフ大会なども行い、スポーツをとおして地域住民の親



支会運動会

睦と体力づくりを積極的に進めている。

一方、単位連合自治会においても同様に運動会やソフトボール大会を行っている地区もある。週れば、体育振興として、読売巨人軍二軍監督・コーチを招き行われた「少年野球教室」は、子どもたちに大きな夢と感動を与え、また運動会においては、地域の者が中心となったグループが、軽体操や華やかな新体操を披露した実績を持つ。

(2) 長淵地区防災対策委員会

発足は、昭和 56 年 3 月である。自治会を中心に地域の団体、機関をもって構成している。

本地域は、平地が少ないところに形成された古くからの集落であり、幅員の狭い道路も比較的多い。このようなことから、災害の予防とともに、災害時において適切な対応を図ることのできる体制の整備、自分達のまちは自分達で守るという意識の高揚を目的に、自主防災計画の策定、防災訓練の実施、避難場所の検討、飲料水の確保など地域住民の防災意識の普及と組織の充実に努めている。

(3) 地域の安全を守る会

地域住民が生活をする上で、安全で安心できる環境を確保することを目的に、平成 20 年 1 月に発足した。

会員や構成団体あるいは各地区での防犯パトロールを中心に活動しており、^{のぼり}幟旗や車両用マグネットシートなども作成し、子供達の健全育成、住みよい環境の実現に向け地域全体で取り組んでいる。

(4) 青少年対策第 2 支会委員会

5 地区に地区委員会があり地区副委員長以上をもって常任委員会を構成し、常任委員会で事業の詳細について検討し、実施している。主な事業として非行化防止啓発チラシの全戸配布、各地区での防犯パトロール、親子ふれあい綱引き大会、講演会などがある。一方、PTA、青少年委員など関係団体等との連絡、情報交換などを行うほか、運動会や市民センターまつりへの参加・協力、また社会を明るくする運動の一環としての講演会を地区関係団体等と共催で開催するなど、青少年の健全育成に努めている。

(5) 調布大祭実行委員会

旧調布地区において行う本大祭を通して、地域住民の親睦を図るとともに、大祭を円滑に行うことを目的に組織し、運営に当たっている。

各団体から選出された委員で構成し、委員長には支会長が当たる。4 月の第 2 日曜日に実施している。

各地区に連綿と続く春の祭典であるが、調布大祭として行うのは、平成 7 年が初回であった。

(6) 長淵地区環境美化委員会

環境美化指導員および環境美化推進員で組織しており、ごみ減量運動や美化運動の推進、不法投棄の防止協力、自治会内の環境美化を目標に、会員の研修を実施するとともに一般廃棄物の排出、ごみ減量等の指導や衛生環境の向上に努め、住みよい環境づくりを推進している。

長淵地区衛生協力会の発会式は昭和 37 年 6 月のことであった。

(7) 消防団第 2 分団

第 2 分団は 6 部から成り、車両 6 台を有している。火災や台風時の出動、春・秋の非常召集訓練、厳寒の歳末警戒、また各地区の防災訓練では知識と経験を生かし、その役割を果たすとともに火災予防、火災に対する意識の向上を図っている。

友田町を 1 部として始まる部の名称は古く、調布村誌資料には消防組の組織として、その名称が記されている。

(8) 交通安全協会第 2 支部

青梅交通安全協会の諸活動とともに、地域における様々な行事等での交通整理・誘導に当たり、住民の安全を確保し、また講習会などにより交通事故の防止、交通安全意識の啓発、啓蒙を行っている。一方、防災対策委員会、地域の安全を守る会等に参画し、安全な地域づくりに貢献している。

(9) 近年の状況

調布地区高齢者クラブ連合会、また各地区の高齢者クラブもゲートボール、輪投げ、保育園児との交流など長年にわたりさまざまな活動を行っている。地域の安全を守る会の構成員

でもある。

近年、女性防火防災の会第2支部が発足し、防火、防災に関する意識の啓発や普及等の活動を始めている。長淵地区防災対策委員会の構成団体である。

一方、長年にわたり婦人の教養を高め地域社会の発展を図るため各種事業等を行い、地域や行政に貢献してきた第2婦人会は、平成15年3月をもってその幕を下ろしている。